学士課程教育における自己点検とその改善に関する年次報告書（総評）

医学部

１．評価結果一覧

自己点検・評価単位	分析項目 1-1-1	分析項目 2-1-1	分析項目 2-1-2	分析項目 2-2-1	分析項目 2-2-2	分析項目 3-1-1	分析項目 4-1-1	分析項目 4-2-1	分析項目 4-2-2	分析項目 5-1-1	分析項目 5-1-2	分析項目 5-2-1
医学プログラム	5	5	4	4	4	5	4	4	5	4	4	5
看護学プログラム	4	4	4	4	4	5	5	5	3	4	3	5
理学療法学プログラム	4	3	3	5	4	4	3	4	4	5	4	5
作業療法学プログラム	2	5	4	4	4	4	4	4	4	4	2	3

自己点検・評価単位	分析項目 6-1-1	分析項目 6-2-1	分析項目 6-3-1	分析項目 6-3-2	分析項目 6-3-3	分析項目 6-4-1	分析項目 6-4-2	分析項目 6-4-3	分析項目 6-5-1	分析項目 6-6-1	分析項目 6-6-2	分析項目 6-6-3
医学プログラム	5	5	5	5	3	4	5	4	4	4	4	5
看護学プログラム	5	5	5	5	3	5	5	5	5	5	5	5
理学療法学プログラム	5	4	4	3	3	4	3	4	5	4	4	4
作業療法学プログラム	5	5	3	4	4	4	4	4	5	4	4	4

自己点検・評価単位	分析項目 6-6-4	分析項目 6-6-5	分析項目 7-1-1	分析項目 7-1-2	分析項目 8-1-1	分析項目 8-1-2
医学プログラム	3	5	3	5	3	4
看護学プログラム	3	4	3	5	4	5
理学療法学プログラム	3	4	2	3	4	3
作業療法学プログラム	3	4	2	3	2	3

（⑤十分に適合する　④適合する　③やや適合する　②余り適合しない　①適合しない）

２．評価結果に対する総評

【医学プログラム】

医学科は平成 30（2018）年 1 月に，日本医学教育評価機構による「医学教育に関する分野別評価」（いわゆる国際認証）を受審し，評価基準に適合していることが認定された。認定時に提示された質向上のための示唆に基づき，さらなる改善のために改革を進めている途上であり，その成果は年次報告書にまとめ提出している。今年度は 12 月に 2 巡目受審を控えており，現在のカリキュラム，卒前教育全般について自己点検を行っているところである。

2020 年度以降は新型コロナ感染症拡大を受け，医学科卒前教育での ICT 教材の作成，活用が進んだ。また，社会からのニーズを受け卒前教育における感染症教育の充実のためのカリキュラム改革を行った。感染症に関する低学年からの基礎知識の導入や症候診断治療学，臨床実習における課題，VR 教材（感染症，IVR，医療面接など）の開発，活用を行ってきている。

また，医学教育センターではコロナ下より学生の相談支援業務を強化し，学生自身からの相談および，チューターや学生支援室からの相談，面談にも対応している。面談ののち，必要に応じて保健管理センターと連携しながら継続的な支援を行っている。2023 年度中にコロナが 5 類となり，オンライン講義から完全対面教育へ戻ったが，学生同士のコミュニケーションなどにも影響が残った 1 年であった。

2023 年度の卒前教育における大きな変化は 4 年生で実施される共用試験（CBT および臨床実習前 OSCE）の公的化である。それまで各大学で合否判定をしていたものが，共用試験実施評価機構が判定を行うこととなり，その準備教育，特に診療手技に関するシミュレータを活用したトレーニングの重要性が高まった。

またこれまでカリキュラム内での海外派遣は 4 年生の医学研究実習のみであったが，2023 年度の臨床実習Ⅱから海外提携校での 4 または 8 週間の臨床実習が単位化された。

学士課程教育の自己点検で挙げられている点検項目は，多くが国際認証基準の認証項目と重複しており，国際認証に適合後に継続して行ってきているさまざまな改革の成果を反映した自己評価となっている。

【看護学プログラム】

保健学科看護学専攻・看護学プログラムにおいては概ね基準を満たしている。看護学プログラムは，専門職の養成，国家試験受験資格の付与という明確な達成目標を持ち，4 年間を通して講義，演習，実習，臨地実習と段階的に基礎理論から実践的知識・技能・態度を修得する方法を展開している。教員が臨床教授等及び臨床指導者と協働して，各学生の到達度を確認し，指導を改善する仕組みを整備していること，また，学生からの評価も高いことから，肯定的な自己評価となった。

令和 5 年度は，「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」に基づくカリキュラム改正による新しいカリキュラムの 4 年度目であり，高齢化に対応した在宅看護学の実習や，研究力強化に向けた専門科目を開講した。具体的な成果はこれから現れると考える。

【理学療法学プログラム】

理学療法学プログラムでは，ディプロマ・ポリシー，カリキュラム・ポリシーに基づき，専門職の理学療法士としての基礎知識，技能，態度を修得させ，科学的思考力と創造性を発揮しうる人材を育成するという達成目標を持ち，教育を展開している。今年度より，新型コロナウイルス感染症の 5 類移行に伴い，従来の対面授業や実習も問題なく再開することができている。結果として今年度の卒業生全員が

国家試験に合格し，過去 5 年間の合格率も全国平均と比べ高い水準で推移し，大学院進学者も 62.1%と保健学科で最も高く，科学的思考力と創造性を兼ね備えた人材育成に取り組めている。さらに入試に関しては，アドミッション・ポリシーに基づき，光り輝き入試総合型選抜（II 型）大学院進学型入試の導入，一般入試での面接試験の導入などの取り組みを含め，質の高い学生の養成にも取り組んでいる。理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則の改正を受け，優れた学生を受け入れ育てるため，1 年次早期から専門教育を学習できるプログラムや，実習科目の充実など，実用的な体制が整備された新教育課程を作成し，現在も円滑に運用されている。

各基準に対する振り返りでは，概ね基準を満たしている。昨年度課題に挙げた分析項目 7-1-1 学部への留学生受入れは，国際部との連携下で短期留学生に向けた体験講義を展開するなど，専攻の魅力を発信する取り組みを継続しているが，理学療法士という日本の国家資格がかかわる専攻の性質上，現時点では積極的な受入れに至っていないことが課題である。

【作業療法学プログラム】

作業療法学プログラムでは，理学療法士・作業療法士学校養成施設指定規則の改正（2020 年度施行）に合わせ，新カリキュラムの作成，導入に取り組んできた。1 年次前期に基礎的な医科学に接する機会がないことは，リハビリテーション専門職に就く意欲の減退につながると考え，入学後まもなく基礎医学に触れ，段階的かつ長期的にその修得内容を深める教育体制を敷いた（1 年次前期に「解剖学Ⅰ」と「生理学Ⅰ」，1 年次後期に「解剖学Ⅱ」と「生理学Ⅱ」，2 年次前期に「生理学実習」と「解剖学実習Ⅰ」，2 年次後期に「解剖学実習Ⅱ」）。新型コロナウィルスの感染拡大により，オンライン中心の講義で実施したが，多くの学生から「分かりやすかった」との評価を受け，これらの科目の定期試験のスコアは，旧カリキュラムの履修性と比較して遜色ないものであった。また，1 年次前期に「リハビリテーション科学入門」を設定した。オムニバス形式で専攻に所属する教授が取り組む研究内容に触れる場を設け，講義前にあらかじめ受け付けた学生からの質問に担当教授が応答する，トークショー・スタイルの講義を実施した。ほぼ 100%の学生から，「理学・作業療法士という専門職に就くモチベーションが高まった」との回答を得た。さらには，Undergraduate Research Opportunity Program; UROP を設定した。1 年後期には大学院進学型での入学生が（必修），2 年前期からは全学生がこれを履修でき（自由選択），早期から大学で行われている研究業務を体験できる機会を設けた。2020 年度入学生は， 2 年次に 10 名（在籍 29 名中）が本プログラムを履修し，早期研究活動を開始した。彼らの内 9 名が 2023 年度の卒業時に大学院博士前期課程への進学を選択したことに，上述の試みがプラスに作用したと受け止めている。

改善すべき課題として，学部への留学生受入れに至っていないこと，リカレント教育の整備が不十分であることが挙げられる。留学生の受け入れについては，作業療法士という日本の国家資格を主目的とした専攻の性質上，現時点で積極的な受入れが難しい状況にあるが，短期の国際交流の機会を設けることは実現可能かもしれないと考えている。リカレント教育については，卒業生に対して訴求力の高い卒後教育プログラムを設定すること，一般市民に対して作業療法への関心を涵養する内容の市民講座を開催するための努力をする必要がある。